

ベ ス ト ピ ア  
Bestopia

「パリ通信 68号」

<http://jkoga.com/>

平成二十九年八月  
第六十八号

< 2017年 8月 >

古賀 順子

「石橋美術館」

8月のパリはがらんとしています。レストランやお店は夏期休暇、学校も会社もひっそりとして、子供も大人も待ちに待った夏のバカンスです。普段は人が通る隙間もないほどびっしり並んだ路上縦列駐車ですが、空気が目立ちます。2002年にスタートした「パリ・プラージュ」も、今年は7月8日から9月3日まで期間を延長していますが、砂のないセーヌ河岸(例年3,000トンの砂を敷き詰める)は、人出も疎ら。さらに、8月に入り、初秋の気温が続いているパリでは、夏は終わったかのようです。

多くの美術館も春からの特別展を終了し、常設展を訪れる観光客が多くなりました。そんな静かなパリで、夏最後の展覧会「ブリヂストン美術館の名品 --- 石橋財団コレクション展」(4月5日から8月21日まで)へ行きました。クロード・モネ『睡蓮』連作を所蔵するオランジュリー美術館での開催です。

1952年東京・京橋で、西洋絵画を常設展示する美術館として開館したブリヂストン美術館ですが、2015年からビルの建て替え新築工事のため、2019年秋まで閉館の予定です。この工事閉館を利用して、2,600点に及ぶ財団コレクションの中から選んだ名作をオランジュリー美術館に貸し出しています。

ブリヂストン美術館は、創設者石橋正二郎(1889-1976)の個人収集から始まり、公益財団法人石橋財団によって引き継がれ、19世紀フランス印象派と20世紀の西洋絵画、そしてその影響を受けて発展した明治以降の日本近代洋画、第二次大戦後の抽象絵画を所蔵しています。今回、オランジュリー美術館で展示されている作品は、青木繁『海の幸』(1904年)、『わだつみのいるこの宮』(1907年)、藤島武二『天平の面影』(1902年)、藤田嗣治『猫のいる静物』(1939-1940年)、坂本繁二郎『放牧三馬』(1932年)を始め、ポール・セザンヌ『サント=ヴィクトワール山とシャトー・

ノワール』(1902-1904年)、ピエール=オーギュスト・ルノワール『座るジョルジュット・シャルパンティエ嬢』(1876年)など、フランス絵画を含む76点です。

ブリヂストン美術館の創設者石橋正二郎は福岡県久留米市出身で、ゴム地下たびの製造から出発し、1931年ブリヂストン・タイヤ株式会社を創立し、現在のブリヂストンに至っています。東京・京橋の自社ビル内に設けた「ブリヂストン美術館」から4年後、1956年郷里の久留米市に「石橋美術館」を建て、石橋財団の運営で続いてきました。私自身、中学校・高校時代に、石橋美術館で、青木繁(1882-1911)、坂本繁二郎(1882-1969)、古賀春江(1895-1933)(本名古賀亀雄)(よしお)など、久留米市出身の画家の作品を見ていました。久留米を離れてからは、石橋美術館へ行くこともありませんでしたが、数十年振りに、パリのオランジュリー美術館で『海の幸』と再会し、懐かしい思いがありました。当時一緒に見に行った友人たちのこと、学生時代に感じたこと、石橋美術館の周辺や展示されていた部屋など、様々な記憶が蘇りました。

石橋財団コレクションとだけで、なぜ石橋美術館の名前がないのだろうと不思議に思っていたところ、昨年2016年9月末で石橋財団が久留米の石橋美術館を撤退し、石橋美術館所蔵の960点を東京のブリヂストン美術館に移したことを知りました。石橋美術館の名称は消滅し、郷土画家の作品が東京へ移ってしまった今、久留米市美術館と改められた美術館は、これからのような作品を展示していくのだろうかと思います。地方の美術館運営の難しさを感じます。

ル・コルビュジエの弟子坂倉準三(1901-1969)の設計で、日本のモダニズム建築を代表する「神奈川県立近代美術館・鎌倉館」(1951年)が昨年閉館し、石橋美術館も事実上の閉館。1950年代の美術館が一つ一つ歴史を閉じるのは残念です。地方美術館の作品が東京に移り、多くの人の目に触れることは歓迎すべきことなのかもしれませんが、少し寂しい気がします。